



副学長就任挨拶

神経機能学講座・分子解剖学分野 教授 井上 芳 郎



平成13年5月1日付けをもって、中村陸男総長のもとで、副学長（総長代行、附属図書館長を兼ねる）の辞令を受けました。

北海道大学をはじめ、国立大学を取り巻く環境の厳しさを考えると、私には大変荷の重い役割と思い、引き受けることに躊躇いたし

ましたが、医学部諸先生の励まし、先輩のご助言もあり、この2年間副学長として新総長を支援することを決心しました。

現在、国立大学のみならず、大学を取り巻く環境は厳しいものがあります。特に、少子化時代にはいり、入学定員が今後急速に減少すること、又、初等中等教育の教育指導要領の変更に伴う学生の資質の多様化、学力の低下が予想されています。そのため、大学における入学制度の改革、教育課程の見直しが早いペースで進んでおり、継続的に取り組むべき大きな課題となっております。また、当然のことながら、大学院重点化された研究機関大学として、高い水準の研究成果を挙げ、社会に還元することを積極的に展開する必要があります。そのためにも、125年にわたって部局の集合体として構築されてきた北海道大学を、総長を中心としてさらに発展が期待できる総合大学としての仕組みに代えていく必要があります。この点につきましては、丹保前総長のもとで設置された様々なワーキンググループで練り上げられた報告を読みますと、学内の意見は一致しているように感じています。これらの課題を検討実施するために、新体制になって、新たに総長室が設置され、私の他に教育担当副学長（徳永理学研究科教授）、研究・社会連携・国際交流担当副学長（藤田獣医学研究科教授）の3名の副学長と総長補佐12名が指名され、活動が始まっています。医学研究科・医学部におきましても、大学院重点化によって組織運営体制を代えたことの意味を考え、従来の小講座的な発想を転換し、早急に、総合的な医学教育研究の仕組みをさらに考えていく必要があります。また、医学研究科が生命医科学の中心にいることをにらんで、北海道大学にこの分野の発展を期する提案を示すことも重要な課題と考えます。

私は広報担当、附属図書館長の仕事に携わることになりますが、現在、広報関係の仕事为例にあげましても、学内の大型計算機センター、情報メディア教育研究総合センター、附属図書館を連携させる情報基盤の整備、学外に向けた広報誌の在り方、ホームページの内容の吟味、情報公開法に係わる大学の対応などがあり、いずれも重要な仕事であります。不慣れとは言っておれず、日々勉強に追われています。

もう一つ国立大学を取り巻く大きな問題として、国立大学法人化の問題があります。6月11日の経済財政諮問会議におきまして遠山文部科学大臣は、「大学（国立大学）の構造改革の方針」として、①国立大学の再編・統合を大胆に進める（＝スクラップ・アンド・ビルドで活性化）、②国立大学に民間的発想の経営手法を導入する（新しい「国立大学法人」に早期移行）、③大学に第三者評価による競争原理を導入（国公私「トップ30」を世界最高水準に育成）と、3点の重要事項を推進する事を表明しました。国立大学協会は、6月13日の総会において、設置形態検討特別委員会で策定された法人化の基本的枠組み（北海道大学ホームページの「総長室だより」の項に掲載されています。）を受け取りました。この案に反対の国立大学もあり、これを総会が了承する形でなく受け取る形になりました。この内容につきましては、北海道大学の「独立行政法人化に関するワーキンググループ（座長：小職）」が検討した中間報告とは、大筋では大差がありません。今後は、文部科学省から6月末に提出される大学改革・法人化の中間報告を待つ状況になっています。現在のところ、今後の動きを明確に示すまでにはいっていませんが、教育・研究の発展のために自由と自律性が保たれる大学を目指して、慎重且つ迅速に議論をすすめているところ です。しかし、あくまでも国立大学は国費（国民の税金）によって運営されますので、教育・研究の自由を担保しながら、社会の批判・評価に耐えうる運営と活動が可能な仕組みを考える必要があります。この2つの面のバランスある組織を構築しなければならないという難しいところを抱えています。医学研究科・医学部におきましては、各分野・講座・専攻がお互いに協力しあって強い組織を作り上げることが、これからの課題と考えます。

第40回医学展を終えて

第40回医学展実行委員長・医学部5年 樋端 佑樹

北大祭への医学部として参加する医学展は、北大祭の中でも市民の皆さんの期待が大きい企画です。本年度のテーマは「21世紀の医学」と決まり、5年生の実行委員が中心となって準備をすすめてきました。スタッフとしては、医学部の1年生から6年生まで多くの学生が参加し、学年や部活の枠を越えた学部としての連帯感を深めると共に、来ていただいた市民の方との交流を深めることができました。

イベントの中心となるのは市民検の通称で親しまれている検査体験会です。これは市民の皆さんに病院での検査の目的や仕組みを体験していただくというもので、今年から市民検はその正式名称を「市民のための検査体験会」から「医学生と市民による検査体験会」へと名前を変え、市民の皆さんとの交流を前面に押し出したものへと生まれ変わりました。

医局の先生がたのお力も借りて勉強会や練習を繰り返して当日に備え、当日は2日間でおよそ600人もの方々にいらしていただくことができました。例年のエコー、心電図、眼科（眼底写真など）、神経内科、血圧問診の他に、アルコールパッチテストと市民の皆さんにお医者さん気分で聴診器を使っていたでいて医学生の心音を聞いていただくという企画も行われ、大変好評でした。

救命救急法体験会では附属病院救急部の松田先生の講義、ご指導のもと、約50名の市民の皆さんが、医学生とともに実際に人形を用いてBLS（Basic Life Support）を学びました。

実験体験会ではアンケートに答えると寿命や健康度が分かるというクイズ形式の企画が好評で、多くの市民の皆さんに楽しんでいただくことができました。また、車椅子の試乗会や逆さメガネ、妊婦や高齢者の体験装具コーナーも家族連れや子供を中心に人気を集めていました。

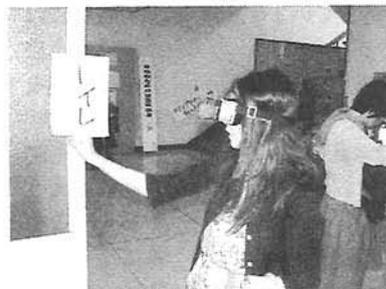
組織学実習室では展示企画が行われました。東洋医学研究会の「効茶～Tea Science」では、お茶の効用をパネルで紹介するとともに生薬の現物の展示、医学部図書館の秘蔵する解体新書など古書の展示も行われました。医療問題研究会は「Real India～サスラドで見たもの」のタイトルでインドの研修旅行の報告を行いました。

北大の教授を講師に迎えて行われた市民講演会は、加藤教授、澤口教授、古川教授にお願いして、それぞれ、「体に優しい癌の手術」、「わがままな脳」、「移植医療の現場～アメリカ・日本・北海道の移植」というテーマでお話をいただきました。「癌の手術」「脳」「臓器移植」という、いずれも市民の皆さんにも感心の高いテーマであり、大変な盛況で、質疑応答も活発に行われていました。

また、医学展の学生企画として、北大IFMSA（国際医学生連盟）の馬場くん（3年）が中心となって企画したAIDSのシンポジウムが開催され、老年保健医学分野の玉城教授のご協力のもと、Dr Gilles Pומרol氏（WHO 西太平洋事務局）や風俗業界の方など、AIDS問題に関して様々な分野から専門家をお招きして、講演やパネルディスカッションなどが行われ、多くの北大生、医療系学生、市民の皆さんにご来場いただきました。

お楽しみ企画としては、スケッチブックを用いたコントで人気の「鉄拳」ライブショーが行われ、入場制限が必要なほどの盛況ぶりで医学展を華やかなものとしてくれました。

本年度も大盛況のうちに医学展を終えることができましたが、これも援助をいただいた同窓会、学友会、各講座の方々、ご協力をいただいた教務掛の皆さん、いらしていただいた市民の皆さんのおかげです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。



第 51 回医系大運動会を終えて

運動会実行委員長・医学部 4 年 内 田 洋 介

記念すべき 21 世紀初めての第 51 回医系大運動会が、6 月 22 日（金）朝 10:00 から本学陸上ホッケー場で行われました。天気はあいにくの曇り空でしたが、約 300 名の学生参加のもと開会宣言が行われ、続いて大会長西医学研究科長の挨拶、医療短大松野部長の挨拶、選手宣誓後に、各種競技が一斉に始まりました。

今年は昨年と同じ競技を行いました。昨年と同様、フォークダンスに人気があり、多くの参加者が、日頃の日常を離れ、楽しく踊っていました。綱引きでは、医療短大松野部長にも参加していただき、熱気あふれる戦いが繰り広げられました。医局教職員対抗リレーでは、飛び入り参加の医短チームを含め 4 チームの参加でしたが、

医学部教務チームが最終周で抜き去り、生体構造解析学分野（旧解剖学第 2 講座）チームの連覇を阻み優勝しました。総合優勝は、赤チームが最終競技のチーム対抗リレーで緑チームを逆転し、栄冠を勝ち取りました。運動会終了後 4:30 からは、中央食堂にてビアパーティーが開催されました。ビンゴ大会なども行われ、学年や学部をこえて学生同士親睦を深める機会となりました。

また、この度は医学部同窓会からの多大な援助を頂き、運動会を成功させることができました。心より、感謝申し上げます。来年度もご協力のほど、よろしくお願い致します。



リレー



騎馬戦

財団法人北海道大学クラーク記念財団設立について

クラーク記念財団 常務理事 井上 芳 郎

財団法人クラーク記念会(以下「記念会」という。)は昭和 35 年 5 月 17 日に設立許可されて以来 40 年間にわたり、ウィリアム・S・クラーク博士の教育理念を継承して、有為な人材の育成をはかる奨学制度と、北海道大学創基 80 年を記念して建設されたクラーク会館の経営に協力するなど、学生の学園生活の充実向上に寄与してきました。しかし、設立目的が、①学生に対する奨学育英事業、②学生、教職員、同窓生、その他大学関係者の厚生福祉の増進という狭い公益活動ということで、昭和 42 年に文部省所管法人から北海道教育委員会所管法人に所管替えとなりました。その後、40 年を経た今日、上記の活動だけでなく、北海道大学を恒常的に支援できる法人の必要性から、文部科学省の理解を得て、記念会を解散し、その基本財産をもとに、本年 5 月に文部科学省所管の「財団法人北海道大学クラーク記念財団」に転換することとなりました。

その寄付行為の内容を抜粋すると次のようになります。

(目的)

第 4 条 この法人は、北海道大学の教育・研究活動、国際交流への支援及び有為な人材の育成並びに教育・研究施設等の整備・保全及び教育・研究交流に伴う福利厚生施設の充実に必要な支援を行い、もって我が国及び世界の学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第 5 条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 教育・研究活動に対する支援
- (2) 教育・研究の国際交流に対する支援
- (3) 教育・研究施設等の整備・保全に対する援助
- (4) 学生に対する奨学育英事業
- (5) 福利厚生施設の管理・運営
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業となっています。

基本財産2億2千6百万円、運用財産5億4千4百万円、役員は、理事長が廣重 力元総長、常務理事が泉 誠二氏と井上、理事として有江幹男、薄葉 久、大森義弘、桂 信雄、黒田 晃、児島 仁、沢 邦彦、蛇川忠暉、高向 巖、丹保憲仁、藤田正一、藤野政彦、堀 達也、松田昌士、村上博一、伊藤 孝の財界、官界、学会からの有力な方々が名を連ねております。

この法人の設立は、従来からあった大学支援法人設立の計画を、丹保前総長の指導のもと、部局長、評議員の賛同を得て、事務局の方々の尽力もあって早急に決めま

した。しかし、公益法人として認可され、名実共に支援法人となるためには、今後3年くらいの実質的な活動が必要であり、そのためにはさらなる資金が必要になります。現在の超低金利のもとでは基金の果実はわずかなものであります。従って、運営の資金としてクラーク財団の基金によるものだけでは全く不十分であり、賛助会員を募り、組織化することで、恒常的な会費寄附が是非とも必要な状況です。教職員各位におかれましても、北海道大学の発展のために、積極的にこの新財団のご支援をお願いする次第です。

平成13年度科学研究費補助金採択状況

平成13年度の科学研究費補助金がこのほど交付されました。

内訳は下表のとおりとなっています。これを12年度と比較すると、件数で6件、配分額で36,500千円の増となっています。

なお、採択率は新規・継続を含み33.8%（12年度は32.5%）で、若干の増となっています。

参考までに、平成10年度分からの補助金内訳を掲載しました。

金額単位：千円

年度別 研究種目	10年度		11年度		12年度		13年度		対前年度比 (13年度を12年度と比して)	
	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額	件数	配分額
地域連携推進研究(2)					1	23,800	1	21,000	(0)	(-2,800)
特定領域研究(A)(1)	2	23,700	1	22,000						
特定領域研究(A)(2)	8	41,200	7	44,700	1	3,500	3	7,600	(+2)	(+4,100)
特定領域研究(B)(2)			2	25,900	2	20,000	2	20,000	(0)	(0)
特定領域研究(C)(2)					4	16,200	6	25,500	(+2)	(+9,300)
基盤研究(A)(1)	2	6,100								
基盤研究(A)(2)	10	110,100	9	79,800	7	44,500	5	75,400	(-2)	(+30,900)
基盤研究(B)(1)			1	5,400	1	3,700	2	10,500	(+1)	(+6,800)
基盤研究(B)(2)	26	130,400	34	172,000	30	162,900	31	160,000	(+1)	(-2,900)
基盤研究(C)	35	49,000	31	41,300	23	40,800	23	34,000	(0)	(-6,800)
萌芽的研究(2)	14	13,600	14	14,500	14	15,300	19	18,600	(+5)	(+3,300)
奨励研究(A)(2)	19	14,400	9	9,400	12	14,000	9	8,600	(-3)	(-5,400)
計	116	388,500	108	415,000	95	344,700	101	381,200	(+6) 106%	(+36,500) 111%

※採択率（新規・継続を含む） 10年度 40.4% 11年度 35.0% 12年度 32.5% 13年度 33.8%

※ いずれの年度も内定段階の数字である。

お知らせ

❖ オープン・ユニバーシティについて ❖

オープンユニバーシティは、高校生を始め多くの方に北海道大学を知っていただく情報提供の場として、本学が企画したもので、今年度は8月6日(月)に開催されます。

医学部では、主に、各研究室で行われている実験室等の見学をとおして、医学への関心を深めていただくことを計画しています。

各研究室見学後には、できるだけ多くの教官に参加し

ていただき、質疑応答の場を予定しています。

なお、参加希望者は、午前の部は9時30分までに、午後の部は13時30分までに、医学部正面玄関前に集合することになっています。

また、今年度から実施される体験入学として、阿部和厚教授による「ミクロの解剖学」と題する体験授業を、8月7日(火)10時から実施予定です。

❖ 医学部ワークショップについて ❖

昨年度に引き続き、第5回目の医学部ワークショップが8月18、19日に開催されます。

今回の主なテーマは、医学教育に係る「コアカリキュ

ラム」と「臨床実習開始前の学生評価のための共用試験の導入」による教育内容の点検評価です。

多数の参加が期待されます。

❖ 医学部卒業試験日程 ❖

今年度の卒業試験は、臨床実習が終了し自主演習を終えた9月3日(月)から始まります。試験期間は11月9日

(金)までとし、11月12日(月)には、卒業試験の締めとしてオスキーを実施する予定です。

❖ 医師国家試験合格状況 ❖

第95回医師国家試験の合格発表は、既に行われていますが、今回の本学部の合格状況は右表のとおりです。

なお、国立大学の合格率は92.4%、全受験者に対する合格率は、90.4%と発表されています。

	受験者数	合格者数	合格率
新規卒業者	82名	80名	97.6%
既 卒 者	18名	12名	66.7%
合 計	100名	92名	92.0%

❖ 学士編入学について ❖

平成14年4月学士編入学のための願書を、7月2日(月)から10日(火)まで受理しました。志願状況は、定員5名に対し、238名の志願者があり、倍率47.6倍となりました。

選抜方法は、第一次試験で書類選考、第二次試験で筆記試験「生命科学総合問題」、および第三次試験では筆記試験「小論文」と面接試験が課せられます。

最終合格発表は、9月21日(金)です。

❖ 寄贈図書のお知らせ ❖

このたび、北海道大学医学部第77期卒業生一同より、
図書（標準薬理学 外65点）をご寄贈いただきました。
厚く御礼申し上げます。

これらの図書は、医学部図書館2階開架閲覧室に配架さ
れています。

大いにご活用下さい。

叙勲・受賞

勲三等旭日中綬章受章

名誉教授 寺山 吉彦 氏
(元医学部附属病院長)

このたび、平成13年度春の叙勲で、元医学部附属病院
長の寺山吉彦氏が勲三等旭日中綬章を受章されました。

同氏の長年に亘る教育・研究への功績、我国の学術振
興の発展に寄与された功績、および医療の発展のために
尽力された功績に対し授与されたものです。

同氏には、心からお祝い申し上げます。

編集後記

第13号の広報をお届けします。前号までの編集
委員、川口、寺沢、傳田先生に代わり、新たに、
岩崎、田中先生とともに有川が加わりました。初
めての編集委員でとまどうことばかりでした。特
に、紙面の構成の決定と記事の依頼は想像以上に
大変な仕事です。何事も自分で体験することの重
要性が分かります。

本号では、井上先生の副学長就任の御挨拶を中
心記事としていただくことが出来ました。これま
での医学研究科長としてのご経験もふまえ、国立
大学を取り巻く環境の厳しさと変化について、現
状と今後をわかりやすく紹介していただきました。
今更ながら認識を新たにしているところです。構
成員各位にも関連する事項ばかりです。本広報が、
これからも関連する情報の源として、また意見交
換の場として機能するよう努力して行きますので、
宜しくお願い致します。

(有川 二郎)

— Home Pageのご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け
付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科/医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 有川 二郎、岩崎 喜信、田中 淳司
富樫 廣子、佐藤 松治